楊貴妃と熱田神宮との関わりを知る

二年（　）組（　）番（　　）

【資料Ⅰ　『梅花無尽蔵』万里集九】

重陽謁熱田楊妃廟

謹白真妃若有霊
開遺廟戸試閑聴
生生合託鴛鴦菊
天寶海棠何故零

重陽に熱田の楊妃廟に謁す

謹んで白す真妃に若し霊有らば
廟戸を開き遺りて試みに閑かに聴け
生生合に託べし鴛鴦の菊
天寶の海棠 何の故にか 零つる

熱田神宮と楊貴妃の伝承について

唐の玄宗皇帝が日本を侵略しようとした時、日本の神々が協議した結果、熱田の大神が楊家に生まれて貴妃となることとなった。そして玄宗に仕えてその心をたぶらかせ、日本侵攻を思いとどまらせた。しかし、玄宗は安禄山の乱にあい、逃れる途中、楊貴妃を馬嵬の地で失った。楊貴妃はたちまちもとの熱田の大神に戻り、船に乗って、熱田神宮に帰還したというものである。

熱田神宮の境内には、楊貴妃の石塔といわれるものがあった。それは境内の末社清水社の近くにあったが、貞享三年（一六八六）の造営の時に廃絶された。今日では清水社の湧き水の中の石が、石塔の頭部であるといわれている。

（参考文献：日下英之（一九九九）『熱田―歴史散歩』風媒社）

清水社と立て札（上）、清水と石塔の頭部と言われている石（下）

楊貴妃を知る

二年（　）組（　）番（　　）

【資料Ⅱ　『唐物語』「第十八　玄宗皇帝と楊貴妃の語」】

A

昔、唐の玄宗と申しける御門の御時、世の中めでたく治まりて、吹く風も枝を鳴らさず、降る雨も時を違へざりければ、皆人、天の下穏（おだ）しきに誇りて、花を惜しみ、月をもてあそぶより他のいとなみなし。御門も、色にめで香にのみ耽り給へる御心の暇なさにや、よろづをば左大臣と聞こゆる人に任せて、やうやくみづからの御政怠らせ給ひけり。

これより先に、元献皇后・武淑妃など聞こえ給ひし后、世に並びなく、御心ざし深くおはしましき。それはかなくならせ給ひて後は、あまたの中に御心かなひたる人おはせざりき。これにより、高力士に仰せられて、京の外まで尋ね求めさせ給ふに、楊家の娘を得給ひてけり。そのかたち、秋月の山の端より高く昇る心地して、そのいきざしは、夏の池に紅の蓮初めて開けたるにやと見ゆ。一度笑むに百の媚なりて、人の心惑ひぬべし。すべてこの世のたぐひにあらず。ただ天人などの、暫し天下れるとぞ見えける。

（　略　）

驪山の宮に行幸し給ひて、（楊貴妃に）霓裳羽衣の舞ひを奏せさせ給ふ。舞の袖、風に翻る度に、玉の飾り庭に落ち積りて、極楽世界の瑠璃の地もかくやあらんとおぼえたり。おほよそ驪山宮の秋の夕べに心をとめぬ人なし。春は春の遊びに従ひ、夜は夜の短かきことを歎き給ひける。かくて、夜もすがら、ひめもすに時を分かず、これより他の御いとなみなかりければ、国の政の澄み濁れるを、いかにも知らせ給はざりけり。すべてこの楊貴妃のはぐくみによりて、世の苦しきことを忘れつつ、誇り驕れる人、その数を知らず。また天の下の人、高きも卑しきも、心に違はじと思へる気色なべてならず。見る人、聞く人、羨みめづるさま、言ひ尽くすべからす。これによりて、女子を産める者は、喜びかしづきて、かかるたぐひを心にかけけるも、をこがましくこそ。

（　略　）

（天宝十年）初秋の七日の夕べ、驪山宮に行幸し給ひて、織女・彦星の絶えぬ契りを羨み、はかなきこの世の別れやすきことをぞ、かねて歎き給ひける。「形は*六の道に変はるとも、あひ見んことは絶ゆる時あらじ」と契り給ひても、

姿こそはかなき世々に変はるとも契りは朽ちぬものとこそ聞け

などのたまひつつ、御手を取りかはして、涙を流し給ひけるを、末の世に聞く人さへ袖の上露けし。

*六の道…六道。仏教で衆生がその業によって生死を繰り返すという六つの世界。

天宝十四年、安禄山の反乱により国が乱れ、玄宗一行は都を離れることになった。その途中、付いてきてくれた兵士どもが、「騒乱のもとがここにある。」と騒ぎ出した。この騒ぎを収めるため、馬嵬という場所で楊貴妃は殺されてしまった。玄宗は楊貴妃を失い、悲しみの日々を送る。乱が収まり、世も平和になった後も楊貴妃のことばかりを嘆いていた。こうして二年が過ぎた頃、「まぼろし」という方士（仙人）が参上して、「楊貴妃が生まれ変わられた所を見つけて参りましょう。」と申し出た。雲に乗って東方へ飛んで行くと、仙女となった楊貴妃がいる蓬莱宮にたどり着く。こうして方士は楊貴妃に会えることになった。

B

かかる程に、夜も明け日も出でぬれば、楊貴妃出で給へり。黄金の簪光鮮かに、玉の飾りめも輝くほどなり。まぼろしにあひ向ひて、しばしは言葉に出だし給はず、まづ落つる涙をぞ所狭げに思さる。方士も袖のしずく隙なくて、やや久しくなるほどに、楊貴妃のたまはく、

天宝十四年よりこのかた、御心の内を思ひやるに、悩ましく苦しきこと限りなし。かばかり妙なる所に生まれたれど、契りの深きによりて、我、浮き名をとめし故郷のみ心にかかれるなど、様々にのたまはするありさま、なほ霓裳羽衣の舞にぞ似給へる。方士、御門の御心のうちを知れりければ、ありのままに聞こえさせつ。互ひに心のいぶせさをはるけて、方士、帰りなんとするに、楊貴妃、黄金の簪を折りつつ、我が物とて御門に奉れとのたまはす。方士、これを取りて、こと浅くや思ひけん、黄金の簪は、たぐひなき物にもあらず。そのかみ、さだめて人知れぬ御契りありけんものを、願はくは承りて奏せしめむと言ふに、楊貴妃、気色変はり、涙まさりて、思し乱るることありと見ゆ。「昔、天宝十年の秋、驪山宮に侍りし時、織女・彦星あひ見る夕べ、長生殿の内音なくて、夜半の気色ものあはれなりしに、御門、我に立ち添ひてのたまひき。天にあらば羽をかはす鳥となり、地にあらば枝をかはす木とならんと。これ、君より他にまた知る人なし。この契り限りなきによりて、必ず下界に落ちて、さだめて二たびあひ見て、むつまじきこと古きがごとくならむ。我、このことをかねて知れり。思へばしかもかなしくて、思へばまた嬉しからずや」など、聞こえさせ給ふ御有様にも、忍びがたき御心のうちあらはれて、馬嵬の道のほとりに、今は限りと見え給ひしタべの恨みも、なほただ今のやうに思せる気色、まことに梨花一枝春雨をおびたり。

光さす玉の*かほばせしほたれてなほ*そのかみの心地こそすれ

方士帰り参りて、このよしを奏せしむるに、御心日を経て悩みまさり給ひて、生まれ給はんほどをも心もとなくや思しけん、その年の夏四月に、みづからはかなくならせ給ひにけり。

*かほばせ…顔立ち。顔つき。

*そのかみ…その当時。馬嵬で最期を迎えた時。

※この資料は、授業を行う便宜上、授業者が一部改変しています。

【資料Ⅲ『源氏物語』桐壺】　※この資料は、授業を行う便宜上、授業者が一部改変しています。

（桐壺帝は、寵愛していた桐壺更衣（光源氏の母）が亡くなり、悲しみにくれている。）

（桐壺更衣の母からの贈り物を帝は御覧になって）亡き人の住み処尋ね出でたりけんしるしの釵（かんざし）ならましかばと思ほすもいとかひなし。

（帝）尋ねゆく　幻もがな　つてにても　魂のありかを　そこと知るべく

絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師といへども、筆限りありければいとにほひ少なし。太液の芙蓉、未央の柳も、げに通ひたりし容貌を、唐めいたる装ひはうるはしうこそありけめ、なつかしうらうたげなりしを思し出づるに、花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき。朝夕の言ぐさに、翼をならべ、枝を交はさむと契らせ給ひしに、かなはざりける命のほどぞ尽きせず恨めしき。

（口語訳）

（桐壺更衣の母からの贈り物を帝は御覧になって）亡くなった人の住処を探し当てたという証拠のかんざしであったならばとお思いになっても、まったくどうしようもない。

亡き更衣を探しに行ける幻術士がいてほしいものよ。そうすれば、人づてにでも更衣の魂のありかをどこそこと知ることができるだろうに。

絵に描いてある楊貴妃の姿は、上手な絵師と言っても、筆力には限界があったので、まったく美しさに乏しい。「大液池の芙蓉、未央宮の柳」といかにも似ている美しい楊貴妃の容姿だったが、唐風の装いをした姿は端麗ではあったろうが、心引かれる様子で美しかったのを思い出しなさると、花の色や鳥の音にも喩えようがない。朝夕の話の種に「比翼の鳥となり、連理の枝となろう」とお約束なさったのに、思うようにならなかった命のはかなさが、永遠に尽きることなく恨めしいのである。